



Book Review

評者：山内豊明
放送大学大学院教授

患者の声から考える看護

著：渡邊順子／本体：2000円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5650



「ちょっと待ってください」の「ちょっと」はいつまで？

医療者であるみなさんご自身は、病院で検査や手術を受けた経験はありますか？

私は医療者として駆け出しの頃に、可能な限り病院での検査や医療処置を受けてみました。胃カメラ、大腸内視鏡、エコー、CT、MRI……。さすがに心臓カテーテル検査は勘弁してもらいましたが、検査がどう受け止められているのかを身をもって知っておきたかったです。麻酔で意識のない間に膀胱内留置カテーテルを入れてもらいましたが、あれが完全覚醒時であったら失神してしまったかもしれません。それは痛みや違和感のためではなく、限りなく恥ずかしいからです。

命や生活を託すことと考えれば、入院して医療ケアを受けるのは、旅客機に搭乗したり、ホテルに泊まることに似ています。旅客機に乗って旅をし、話題のホテルに泊まりワクワクすることはあるでしょう。しかし入院は好んでするものではなく、致し方なくするものです。医療者にとっての日常場面である医療機関で過ごすことは、患者さんにとっては非日常の未知なる体験であり、期待が膨らみワクワクするのは逆の、何をされるのだろうかという不安がついて回ることでしょう。

そのような場で、意を決してナースコールを押した患者さんにとって、「ちょっと待ってください」の「ちょっと」はいつまでのことなのでしょうか。また、

いきなりオムツのなかに排泄をせよと言われても、到底できるものではありませんね。

「食べる」という行為と、「排泄する」という行為は、ともに身体の内外的「入口・出口」にかかわること、本能的に強い羞恥心を引き起こします。胃や大腸のなかを映し出されても恥ずかしくないですが、口のなかや消化管の出口を見られるのは、とてつもなく恥ずかしいものです。睡眠中は完全に無防備な状態で命をさらけ出しています。これら「取り込む・出す・眠る」は人間にとって最も基本の自己完結的に行うことゆえに、これらの行為についての意思表示も遠慮しがちになるでしょう。

その患者さんにいちばん身近に接するのが私たち看護職です。「こういう看護がしたい」では、主体が私たちになってしまいます。しかし本来の主人公は患者さんであり、その患者さんが「こういう看護をしてほしい」であるべきでしょう。もしも自分自身が患者であったならば、という立ち位置で考えるべきです。そして「その人の生き方を考え抜き」（考えるでなく、考え抜き）、さらにその気づかいを悟られないことこそが本当の気づかいでしょう。

本書の随所にあるキーワードが心に響きます。それを何倍にもするイラストはこのうえもなく見事です。本書はすてきなナースとなるためのすばらしい手引書なのです。